

日時: 2014年10月29日 14:00-15:30

場所: 401

フォーカストセッション

第2回 オミックス解析における実務者意見交換会 The Second Working Group Meeting on Omics-based Analysis

開催趣旨:

ゲノム・トランスクリプトーム・プロテオーム・メタボロームをはじめとするオミックス解析は、次世代シーケンシングの普及と相まって、分子生物学のみならず医学・薬学・農学などの分野に発展をもたらしている。近年では、オミックス情報に対して環境因子や疾患に関する情報などの付帯データを組み合わせ、ビッグデータによる知識発見のための試みも世界中で進められている。

さて、昨年度の第1回ではアカデミアの第一線でオミックス情報の解析に携わる研究者をお迎えしたが、本年度は企業の視点からオミックス解析への期待と現実、個人情報保護や生命倫理に関わる諸問題、ブレークスルーのためのアイデア、人材とキャリアパス、そして将来的なビジネス展望などについて広くご討論いただき、会場の方々とブレインストーミングを行う場を提供したい。

モデレーター: 茂樺 薫 Kaoru Mogushi

順天堂大学大学院 医学研究科 ゲノム・再生医療センター Center for Genomic and Regenerative Medicine, Juntendo University

神田 将和 Masakazu Kohda

埼玉医科大学 ゲノム医学研究センター トランスレーショナルリサーチ Division of Translational Research, Research Center for Genomic Medicine, Saitama Medical University

Phenome = Genome + Envirome -個人全遺伝子解析時代に向けて-

丸山 智久 Tomohisa Maruyama

ENVIROME 株式会社 代表取締役兼 CEO President & CEO, Envirome, Inc.

東京医科歯科大学大学院 歯学総合研究科 生命情報学 Department of Bioinformatics, Graduate School of Medical and Dental Science, Tokyo Medical and Dental University

GWASに続き、EWASという考え方も提唱され、本年7月にはNIH's National Center for Advancing Translational Scienceが遺伝情報を創薬につなげるなどオミックスデータ解析結果がダイレクトに社会に役立つ兆しが見え始めてきた。匿名化された個人の全遺伝子と環境子情報、表現子(表現型)情報を比較し、そこから知的財産を生み出す試みがますます活発化していくとみられる。また、健康関係デバイスの進展も目まぐるしくそれらのデータを繋ぐバイオインフォマティクスの必要性もますます増してくる。

今回の発表では、次世代のオミックス情報活用のヴィジョンを踏まえ、グローバルかつローカルに現在のバイオインフォマティクスに足りていない視点、創薬等に必要データデザイン、バイオインフォマティクスとして求められる全体における役割などの点を考察する。

パーソナルゲノムサービスを始めて見えてきたこと

高橋 祥子 Shoko Takahashi

株式会社ジーンクエスト 代表取締役 President, Genequest, Inc.

ゲノムを読むことが当たり前になった時代には、適切な倫理観、コミュニケーション、研究のサイクルなどが求められている。今後ゲノムを読む技術が浸透していくとどのような展開が待ち受けており、どのような問題に直面するのか、研究者としては何ができるのか。既に動き出しているパーソナルゲノム時代の現状と未来について、パーソナルゲノムサービス事業を立ち上げた経緯を交えながら、事業を通して感じること、見えてきたことについてお話いたします。

産業界で求められるバイオインフォマティクス

緒方 法親 Norichika Ogata

株式会社日本バイオデータ 代表取締役社長 CEO and Founder, Nihon BioData Corporation

次世代バイオ医薬品製造技術研究組合 事務局顧問(ゲノム技術) Manufacturing Technology Association of Biologics

弊社ではデータ解析サービスを提供しております。本セッションでは架空の案件を具体的に想定し、あまり喜んでいただけないばかりでなくバイオインフォマティクス自体の価値を貶める解析モデルと、喜んでいただけ、かつ研究者、技術者の自己実現に繋がる解析モデルを提示しながら、我々の考えるバイオインフォマティクスのあるべき姿について紹介します。